

OSAKA JAPAN SDGs Forum

SDGs 全国フォーラム 2025

開催レポート



Osaka Prefectural Government



OSAKA SDGs



OSAKA JAPAN SDGs Forum

— みんなの知恵をつなげて、世界を変えよう —

2030年のSDGs達成、そしてその先の未来を見据えて。大阪・関西万博の舞台で、あらゆる行動力が集結します。
 議論から実践へ、学びから変革へ。大阪から世界へ発信するこのフォーラムは、SDGs達成への道筋を示すだけでなく、
 2030年以降の「SDGs+beyond」—より良い未来への新たなビジョンを描き、一人ひとりの「今」の行動を、持続可能な「未来」へとつなぎます。
 ここから始まる、新しい時代のSDGsアクションへ。

開催日時：2025年9月5日(金) 13:00~17:30

会場：EXPOホール「シャインハット」(大阪・関西万博会場内)

参加者数：1,552名

主催：大阪府

後援：内閣府 外務省 環境省 経済産業省 地方創生SDGs官民連携プラットフォーム 国際連合地域開発センター(UNCRD)
 一般社団法人日本経済団体連合会 一般社団法人SDGs市民社会ネットワーク 全国知事会 全国市長会 全国町村会 滋賀県
 京都府 兵庫県 奈良県 和歌山県

資料コーナー：内閣府 国際連合地域開発センター(UNCRD) 埼玉県 神奈川県相模原市 岐阜県岐阜市 愛知県豊田市 滋賀県
 への協力 大阪府堺市 大阪府阪南市 兵庫県 岡山県岡山市 広島県東広島市 徳島県美波町 福岡県 沖縄県



01 主催者挨拶

■ 大阪府知事 吉村 洋文

大阪府は、万博の開催都市として、世界の先頭に立ってSDGsの達成に貢献する、「SDGs先進都市」の実現をめざし、G20大阪サミットの首脳宣言で共有された「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」の推進をはじめ、府民や企業の皆様によるSDGs宣言プロジェクトなど、様々な取組を進めています。フォーラムのコンセプトである「みんなの智慧をつなげて、世界を変えよう」には、多種多様なステークホルダーの熱意やアイデアを結集し、持続可能で豊かな社会に向けた、新たな共創を生み出したいという、我々の強い思いを込めています。SDGsの目標年次である2030年まで残り5年。「EXPO for SDGs」を掲げる大阪・関西万博から、皆様とともにSDGsアクションを加速させていきたいと考えています。多様な視点が交わることで、未来を動かす力が生まれます。皆様には、本日のプログラムの中から、関心を持たれた活動への参画や、SDGsアクションの充実、他のステークホルダーとの連携など、より良い未来に向けた実践につなげていただくことを、心から期待しています。



02 オープニングアクト



■ 「光結び」

オープニングでは、ダンスカンパニー「DAZZLE」とダンスユニット「BOTAN」が、公募で選ばれた障がいのある方を含む約70名の参加者とともに、ダンスパフォーマンス「光結び」を披露しました。舞台は、一つの小さな光が生まれ、その光が次第に寄り添い重なり、大きな輝きへと広がっていく構成で進みます。一つひとつの光は小さくとも、集まれば世界を照らす希望になる——そんな願いが込められ、人と人、過去と未来、伝統と革新を“光”で結ぶというテーマが鮮やかに表現されました。生命の躍動が会場全体に伝わり、未来へ続く道を照らしてくれるような時間でした。出演したダンサーの皆さんの力強い表現に、大きな拍手が贈られました。

03 来賓挨拶

■ 外務大臣 岩屋 毅 様 ※肩書きは開催当時のもの

大阪・関西万博は「いのち輝く未来社会のデザイン」を掲げていますが、「いのち」は最も尊重されるべきものです。日本政府は、人々が恐怖や欠乏から免れ、尊厳を持って生きられる世界をめざしており、この人間の安全保障の理念は、SDGsがめざす未来像そのものです。

日本は再生可能エネルギー、循環経済、気候変動対策など、国内外でSDGs達成に向けて官民一体で取り組んでいます。しかし、実現には国だけでなく、地方の創意工夫が欠かせません。地域の実情に応じた取組が、SDGs達成の鍵となります。大阪府が「SDGs先進都市」をめざし新たな挑戦を続けていること、心強く思っております。本フォーラムが先進的な取組を共有し、2030年以降のSDGs+ beyondについて議論を深める機会となり、世界全体のSDGs達成に大きく貢献すると確信しています。



■ 国際連合地域開発センター 所長 村田 重雄 様



国際連合地域開発センターは、国際連合経済社会局とともに、各国のSDGs推進を担っています。大阪府には日頃より私どもの活動にご協力いただき、またSDGsのローカライゼーションに積極的に取り組んでいただき深く感謝申し上げます。また本日ご参加いただいている皆様が熱心にSDGs推進に取り組まれていることにも敬意を表します。2025年はSDGs採択から10年であり、今年7月に発表された「持続可能な開発目標報告2025」では教育、保健、エネルギーなどに成果が見られる一方、全体の進捗は依然として不十分という厳しい結果でした。2030年までの残り5年、取組の強化と加速が喫緊の課題です。本フォーラムが知見と成功事例を共有し、SDGsの推進をさらに加速させる場となることを期待しています。

■ 国際連合 経済社会担当事務次長 李 軍華 様

2030アジェンダの採択から10年が経過した今なお克服すべき課題は少なくありません。測定可能なSDGsターゲットのうち、順調に進展している、あるいは中程度の進捗を見せているものは全体の35%に過ぎず、行動の加速が喫緊の課題です。昨年9月「未来サミット」において「未来のための協定(Pact for the Future)」が採択され、より強固な国際協力を通じたSDGs実現の加速に向けた世界的な決意が示されました。これは大きな節目となりました。本フォーラムは、成功事例を共有し、知見を交換し、分野や国境を越えた協働を促進する極めて重要な場です。将来世代のために包摂的で強靱で持続可能な社会を築くという共通の決意を今一度、ともに新たにいたしましょう。「誰一人取り残さない」その実現は皆様のリーダーシップにかかっています。



04 基調講演

■ 慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 教授 蟹江 憲史 氏

SDGsの目標年次である2030年まであと5年ですが、SDGsはそこで終わりではありません。その先もどんどん続く必要があります。だから「持続可能」という話になってきます。大事なことは、科学の声をしっかりと聞いていくということです。二酸化炭素の濃度も上昇し、メタンも増え、地球が限界を超えつつあるといろんなデータが示しています。人の行動が地球を変える「人新世」に入った今、人の行動を変えれば地球の状態も変わるということです。しかし、残された道は非常に狭い。貧困や飢餓を止めながら、気候変動対策もしていく、同時に森や自然と共生していく必要があります。そういったことを一緒に進めていく道は本当に狭い。それには「トランスフォーメーション(変革)」が必要です。変革の第一歩は、測定し見える化すること。できないところは補完し、できるところは伸ばす、という行動ができます。そしてその行動を広げ、仲間を増やしていくことが重要。またSDGsの先のこともそろそろ考え始める必要があります。この大阪の地で、SDGsの先を考えるという「ビヨンドSDGs官民会議」が公式にスタートしました。官民の力を合わせ、日本的な民主主義のモデルを使いながら、それを世界に広め、対立ではなく、対話でビヨンドSDGsを考える動きが始まってきています。もしこれを日本から発信できるとしたら、これは日本にとって大きな力になりますし、それを世界の仲間と一緒にやっていくということができれば、これは世界にとって大きな力になると思います。



05 特別講演



■ シュナイダーエレクトリックジャパン カントリープレジデント 青柳 亮子 氏

本日の登壇のきっかけは、我々が獲得している外部からの評価によるものです。米国のタイム誌等による「世界で最もサステナブルな企業」に2年連続で選出されました。また、世界経済フォーラム(ダボス会議)で発表されるサステナブルな企業ランキングでも2021年と2025年に一位の評価をいただきました。シュナイダーがサステナビリティに力を入れ始めたのは、今から20年前の2005年です。世界で初めてサステナビリティバロメーターという仕組みを作り、サステナビリティの活動を数値化して公表してきました。そして社会の変化に合わせ、柔軟に変え、現在は「サステナビリティインパクト」として、進捗を3カ月に1回公表しています。サステナビリティをコンプライアンスやルールのための取組としてではなく、会社の業績(パフォーマンス)としっかりとつなげて考えています。我々には、サステナビリティを中心としたビジネスがあり、それに関わる新しいアイデアがあります。そのおかげで、投資家や関係者から信頼を得ることができ、その信頼が私たちの力となっています。会社の業績・成果が環境や社会に良いインパクトを与え、環境や社会への取組がまた、会社の成長につながってくる、という好循環を生んでいます。「IMPACT starts with us」、インパクトは私たちから始まる。我々は、日本の未来に貢献するインパクトメーカーとして、日本のサステナビリティにも貢献していきたいと考えています。未来を変える力は皆さんの中にもあります。

06 パネルディスカッション 1

Theme

みんなで減CO2(ゲンコツ)プロジェクト

大阪発 全国・世界へ ~消費者とともに挑戦するカーボンニュートラル~

「みんなで減CO2(ゲンコツ)プロジェクト」とは、買い手である我々一人ひとりが、環境に良い商品を知り、購入に至るための意識改革をめざすプロジェクトです。行政による消費者教育やメーカー・小売りによる販促、金融機関の協力など、公民で連携を取ることが重要な鍵となる中で、各視点からこのプロジェクトの意義、この活動を広げるためにできることは何かをディスカッションしました。

株式会社日本総合研究所
創発戦略センター
チーフスペシャリスト

佐々木 努 氏

株式会社三井住友銀行
代表取締役 兼 副頭取執行役員

道岡 俊浩 氏

株式会社万代
常務取締役

河野 竜一 氏

江崎グリコ株式会社
執行役員 SCM本部長

高橋 康巳 氏

大阪府
環境農林水産部 部長

原田 行司 氏

当プロジェクトでは、買い物の行動を将来への投票活動として捉え、生活者側が世の中を変えていく、そのようなムーブメントを起こしたいと考えております。現状、環境に配慮した商品は通常より価格が高くなってしまいう傾向にあり、生活者にとっては手に取りにくい状況です。また買いたいと思っても、商品が知らない、売り場に見当たらないという声も聞きます。



この状況を打破するにあたり、まず環境に良い商品を知ること、そして生活者がその商品を応援するという流れを作っていきたいと思っております。自治体や学校では啓発教育活動を展開し、民間側では売り場を通じて消費者の皆さんに商品を知り、購入行動につなげていただけるよう、各所と連携し、大阪府からさらにエリアを拡大して進めていきたいと考えております。 —佐々木氏

SMBCでは企業の脱炭素化を支援してまいりましたが、生活者の消費行動や意識の変化が伴ってこそ、脱炭素社会の実現が可能になると考えております。そのため、Web通帳への切り替えによるコスト削減を原資として森づくり活動へ寄付を行う「SMBC Greenプロジェクト」や、子どもたちを対象とした地球環境を学ぶ体験型プログラムの提供など、個人のお客様に向けた取組を進めています。知識の提供だけではなく、実体験を通じた気づきこそが、行動変容の起点になると考えております。



当プロジェクトは、様々なプレイヤーが連携し課題に向き合うことで、より大きな社会的価値を創造できると考えております。皆さんと社会変革の動きをさらに広げ、日本発の共同モデルとして世界に発信できるよう尽力してまいります。

—道岡氏



昨今タイムパフォーマンスを重要視する傾向が高まっているほか、売り場は商品情報や様々なコラボ・キャンペーンのお知らせであふれているため、減CO2プロジェクトの情報を生活者に届ける難易度はどうしても高くなってしまう。今年はゲンコツキャンペーンへの参加1件につき5円の寄付がなされ、環境保全につながることをポスターなどを用いて全169店舗でアピールし、全体で3,000名を超えるご参加をいただきました。また8月には一部店舗の店頭で告知ツールの配布などを行い、お子さんの夏休み課題などに生かすご家庭もあったようで、好意的なご意見もたくさんいただいております。

—河野氏



物流・生産・調達の効率化によるCO2削減のほか、次世代エネルギーへの転換などの技術開発を進めています。環境に良いからと、価格が少し高い商品を購入してほしいと言ってもなかなか伝わらないため、環境配慮による価格増をお客様に納得いただけるよう、江崎グリコのめざすおいしさと健康に加えて、消費する際の商品価値の向上につながるマーケティング・商品開発を推進しています。

「カーボンフットプリント」のCO2排出量の測定と可視化については、商品表示を見たお客様に「この商品は良いな」と思ってご購入いただけるのが理想ではありますが、実際にはかなりコストのかかる取組です。その点は生産者や物流事業者、販売店のほか、自治体やメディアなど、皆さんと連携して支え合っていければと考えております。



—高橋氏

大阪府では、減CO2プロジェクトと並行して「おおさかカーボンフットプリントプロジェクト」という、脱炭素に貢献する商品・サービスにCO2削減量をわかりやすく表示する取組を進めています。現在は大阪産(もん)の農産物中心ですが、今後はシェアサイクルなどのサービス、衣類のリサイクル・リユースなどへ拡大していきたいと考えております。

最後に、オゾン層の問題についてお話しさせていただきます。1987年にモントリオール議定書が採択されてからオゾン層は徐々に改善しておりまして、2060年代には元の状態まで回復すると言われています。この事例から、一人ひとりの努力が地球規模の課題解決にも貢献するということが分かります。今後も脱炭素社会の実現に向けた取組にご協力いただけますよう、よろしくお願いいたします。



07 身体障がい者補助犬啓発

目や耳、手足に障がいがある方の大切なパートナーであり、共生社会のための大きな役割を担っている補助犬。不特定多数が利用する施設などでは、使用者が補助犬を同伴することを拒むことはできません。しかし、補助犬の同伴を拒否されるケースが後を絶ちません。啓発動画を上映後、スペシャルゲストに長年、盲導犬の育成支援を行う歌手の中村美律子氏が登場。一人ひとりが考え、取り組み続けることで、共生社会の実現につながることをお話しされ、代表曲「河内おとこ節」を披露しました。



08 フォーラムのプレイベントレポート



■ NTT西日本株式会社 経営企画部
ミライ事業共創室 担当課長
QUINTBRIDGE
オープンイノベーションデザイナー
下川 哲平 氏

QUINTBRIDGE(クイントブリッジ)は大阪の京橋にあるNTT西日本が運営するオープンイノベーション施設で、これまで多種多様なプレイヤーが共創によりプロジェクトを生み出してきました。「Self-as-We」という施設理念があり、これは、社会課題を解決するために、主語を「私」として「あなた」に協力してもらうのではなく「私たち」でチャレンジしよう、という考え方です。この理念のもと、本フォーラムに向けたプレイベントを大阪府と連携し開催しました。
—下川氏



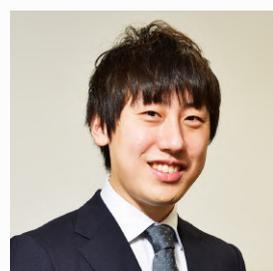
■ 大阪府 政策企画部
企画室連携課 主査
和田 洋一

「SDGsとビジネスの価値」をテーマにしたプレイベントは、これまで2回開催しました。初回は「SDGs×ビジネス」が広がらない理由について、第2回は「SDGs×ビジネス」を広げる方法について議論しました。参加の企業の皆様からの関心も高く、毎回、熱量の高い議論を交わすことができました。フォーラム後も「SDGsとビジネスの価値」をテーマにした企画を実施したいと考えています。 —和田

09 講演

■ 慶應義塾大学 理工学部 システムデザイン工学科 准教授 **川久保 俊 氏**

大阪府の「私のSDGs宣言プロジェクト」では、大阪府民による5,000件以上のSDGs宣言がなされており、誰でも閲覧することができます。今回は宣言文の中でどういったキーワードが一緒に使われているのかを分析しました。大阪府民の特徴としては、ゴール14「海の豊かさを守ろう」において、「ゴミ」と海洋プラスチック汚染に関するワードと一緒に使用されていることが多い点が挙げられます。G20の開催地であること、「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」について多くの啓発活動が行われたことから、海洋プラスチック汚染への意識が高くなっていると考えられます。このように分析することで、ご自身の現状把握、長所・短所を認識するほか、対話や協働の促進、成果の創出、効果の検証につなげることができます。



10 ユース世代活動発表

■ NPO法人Deep People 中尾 榛奈 氏

2019年に始まった「関西SDGsユースアクション」は、関西の若者によるSDGs達成に向けたアクションやアイデアを募集し、表彰しています。また、その後の実現支援も行っています。夏休みを中心に学びや発表の場を提供し、今年は万博でも登壇の機会をいただきました。受賞アイデアが絵本として出版されるなど実現例もごございます。高校生たちは学校で学ぶだけでなく、自ら行動を起こしています。この活動を拡大していくため、応援や連携のお声があれば、事務局までぜひお寄せいただければ幸いです。



聞こえのハンデの無い未来社会をめざす

■ 関西大学北陽高等学校 SOSカード探究チーム

SOSカードとは、聴覚障がい者の方が災害時などに周囲と意思疎通を図るための携帯型コミュニケーションツールです。私たちは高校1年生の時から開発を続け、このたび完成させました。リングで一体化し、ライトやペンも付けられる携帯性が特徴です。避難時・避難後・日常の3区分のカードを収録し、必要な場面で迅速に使えるよう工夫しました。デザインはユニバーサルデザインを採用。避難時カードは黄色と黒を使い緊迫感を表現しています。白紙カードも付け、書き足しや筆談にも対応できます。名刺サイズで持ち歩きやすく、全20種類で構成しています。現在、東淀川区役所で配布されており、デフリンピックでは海外選手へも提供する予定です。



投資から「再生」の「波動」を社会に起こす ReVibe(リバイブ)

■ 山脇学園高等学校 My blue sparkling

私たちは「投資から再生の波動を社会に起こす」をテーマに、ESG投資特化型アプリ「ReVibe」を提案しています。先進国の中でも日本はESG投資の割合が低く、短期利益を求める企業を選ばれがちです。ReVibeでは、企業と投資家をつなぐため、ESG活動を短い動画で理解できる機能やユーザー評価に基づくESGスコア、高スコア企業を応援すると特典や試作商品が得られる仕組みを備えました。ユーザーの評価や応援が、企業のESG活動を強化する動機づけにつながります。アプリは無料で利用でき、企業からの使用料や有料プランで運営します。多くの人がESG投資に関心を持ち、持続可能な社会が進むことを願います。

11 府内大学の取組

■ 学校法人立命館 総合企画部 社会共創推進課 課長 斉藤 富一 氏

立命館大学では、社会とのつながりが学生の挑戦を後押しするという発想から「ソーシャルコネクティッド・キャンパス構想」を提案し、大阪いばらきキャンパスの新棟に、TRY FIELDというコンセプトのもと、社会共創の拠点を整備しました。学生・院生が正課外でも社会と関われる機会を広げるため、企業・自治体との共創ネットワーク組織として、Ritsumeikan Innovation Network for Co-creation(RINC)会員制度を設けています。学生は会員組織と共創関係のもと社会課題に取り組み、実践による成長を促せる点がこの仕組みの特徴です。また、マイクロソフトと協働し独自のAIを学生とともに育てるプロジェクトも進行中で、大阪府と連携したSDGs課題の解決にも取組を広げています。活動はWebやSNSでも発信していますので、ぜひご覧ください。



12 パネルディスカッション 2

Theme

次期開催都市によるコンテンツ

今回のSDGs全国フォーラムの開催都市である豊田市とのコラボレーション企画として、官民のパートナーシップによるSDGs推進について、パネルディスカッションを行いました。

豊田市 市長

太田 稔彦 氏

トヨタ自動車株式会社
サステナビリティ推進担当
統括部長

大塚 友美 氏

慶應義塾大学大学院
政策・メディア研究科
教授

蟹江 憲史 氏

豊田市は、企業や研究機関など多様なパートナーと協働してSDGsを推進しています。カードゲームを使って学びの場を広げるなど、参加のハードルを下げ、市民の暮らしに根付いた地方都市ならではの取組を進めています。また、国連と連携して開発した指標によりSDGsの達成度を評価し、市の強みと弱みを可視化する活動や、取組状況や進捗などを報告するVLR (Voluntary Local Review) の実施にも力を入れています。課題解決の共通言語としてSDGsを活用しながら全国に広げていきたいと考えています。10月には「2025国際首長フォーラム」を開催予定です。こうした機会を生かして、地域から世界へ、“Think locally, Act globally.”を軸に、全員でSDGsを推進していきましょう。 —太田氏



トヨタ自動車は、創業時から続く「誰かのために」という精神を軸に「モビリティカンパニー」への転換を進めています。そうした変革において、私たちはミッションを「幸せの量産」と定義しています。多くの人のニーズに応じて多様な幸せをつくり、それを量産することが、当社のめざすモビリティ社会につながると思います。今回のテー



マにも関連しますが、サステナビリティに取り組むうえで大切にしているのが、「町いちばん」というキーワードです。グローバルにおけるナンバー1ではなく、町の人々から愛され、信頼される存在となることをめざしています。地域に寄り添い、皆さんとタッグを組んで未来のモビリティを形にしていきたいと考えています。 —大塚氏



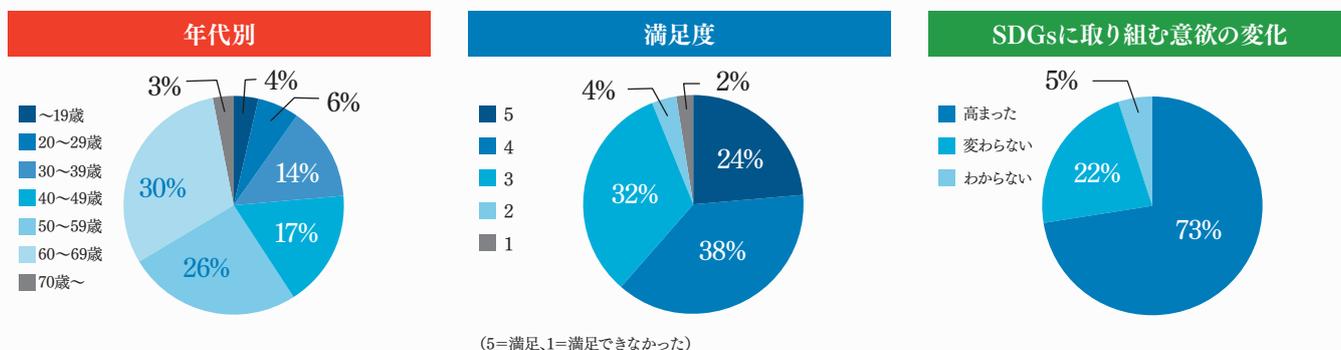
持続可能性は地域の文化や暮らしに根ざした行動から生まれます。地域で生まれる点のアクションをつなぎ、線や面へ広げていくことがこれからますます重要だと思っています。SDGsは世界共通の目標で、同じ指標で進捗を客観的に見られる点が自治体間の学びや連携を後押しします。豊田市が積極的に取り組むVLRも、自治体が自ら国際社会へ学びを発信できる貴重な機会です。互いに学び合う関係づくり役に役立つと思います。また、豊田市で開催される「FIA世界ラリー選手権(WRC)」のように地域と企業が協働する事例にも大きな可能性を感じています。地域の特性を生かし、また他地域の工夫も柔軟に取り入れていくことが、真にサステナブルな取組につながっていくでしょう。 —蟹江氏



13 来場者アンケート結果

Googleフォーム回答数:164人

※一部抜粋
※小数点以下第一位で四捨五入



14 来場者の声

※一部抜粋

- 物価高の中、サステナビリティ商品を手にとってもらうには、普及啓発だけでなく、小型化などによる低価格商品の展開ポイントなど、もう一工夫必要のように思います。
- 高校生がESG投資をテーマに取り上げていることに驚きました。きっとこのメンバーの中から社会を変えるイノベーターが生まれると思います。
- 地球規模の課題について、自分のこととして捉え、その解決に向けて環境ムーブメントを起こすためには、一人ひとりが持続可能な社会の構築に必要な構成員であると認識することが重要だと改めて思いました。beyond SDGsに向けて次世代にもしっかり継承していくことが重要ですね。
- コンプライアンスのためのSDGsではなく、世界をより良くするため、それをビジネスにしていくためのSDGsという考えが素晴らしいと思います、大変勉強になりました。
- 日本国内はSDGsの言葉の普及率が高いことも、世界で達成率が35%であることも知りませんでした。SDGsという言葉の浸透を生かし、これからは達成する見込みのある取組と達成できていない取組を浸透できたらいいと思います。
- 太陽光発電、水力発電、風力発電の仕事をしているが、自分がまだまだ知らない事が世界でたくさんある事に感動しました。
- 国連でのビヨンドSDGsの検討が2年後というスピードで行われていくことに驚きました。私もぜひ参加したいです！
- 今日のパネルディスカッションで、一企業として、地域や他企業、自治体と一緒に進めていくことが重要であり、それにより人々の行動変容を促し、地球貢献につながると改めて感じました。地域や他企業と接する機会を作りたいので、またこのようなイベントを開いていただきたいです。

